浅草十二社

櫻

万屋弥三郎

へ 13
2905
1

嵯峨の仮寝

序

雲迦耶麻羅城仮寐の叙

一大乗経年代

釋迦尤尼世尊の教主

嘆ぜのこゝひ。こゝ二十大千世界の教主

光つゝ〳〵

難陀。彼の初年の埋ふ所にサテ就つ思

ふ。実小慶大元を生る。佛の慈悲

へ13
2905
巻1
へ13
2905
1-7
昭和文庫

序

雲迦耶麻羅城仮寐の叙

一大稔年 吠檀善犬虚空を
嗜ほのかに。二十六万世界の教主
釋迦牟尼世尊を拝みたまふ
光のうつるに。数ならぬ人民まで
難を逃れ。彼の初年の埋ふ所で
ふ。実小慶大元を知る。佛の慈悲

中
成
へ13
2905
巻 1
へ13
2905
1-7
昭和九年七月五日
9-7-5
作

恵華

雪続て廣き果なる著作の跡
再び起るとやらん見未なるものを
拙き洋服屋の世の栄え悲酸なるの脚
閑よ者り移へ場渇仏を抱きもうかぬう
紛雑へ繰るものの印度に大いなる術
その性のよ伸べる一條は尊く学的の
風態ふ引つけるもバ自然に意味れ合ざる

ことなかるべしと雖も我作の俳諧あれば見
年ごとに四方八隅遠く他郷第
浦々に佛の教の違ひ人限もまた中も
ひとりとして洗んの赤ぶ紙寿ふ
霜葉は二月の花より紅なる黄藤よ
年ごとに拙

拙著生れ出ずるの誌

摩訶陀國の
淨飯王
淨飯王ハ
北と
大多屋
大右衛門

善覺大臣の
女兒摩耶夫人
摩耶夫人
於摩耶
擬人
本文ハ青龍城ニ
両個夢の奇瑞
あり
この編ハ
桃の節供ニ思ひ
図らぬ奇縁
一雪齋

○烏將軍小比丘
於耶麻
傳人
烏言
橋曇彌
小擬
燒女兒
於橋

○馬將軍
小比丘
於橋
傳人
馬造
千種有功卿

雪廼耶麻 嵯峨の假寐卷之一

東都 松亭金水編次

第一回

そも人とはなにとて。世の益ならぬ貴しとも。尚獅の益あるべしと。境ふなとを貪りて。月日を仇ふくるあい。俗ふつる穀潰しなり。天道の罪人なり。さまざま探致い天人の上を知らずわど美なく。或ひは巨万にて万万両の。分限といふとも。世界のうち

山い一本の松杉ふも茂りあべ。まゝを以てこの冊紙を
人一心の爲に祈行ぐるゝぎゝん。と昔の人の語を稱
う。神祇釋教惡言雜。嫌きまで淺きまでこう入き
て。稱き人ふ行を稱を青しし。紹つあげさるあの言葉
べかの婀娜めける風山い行ゝと。その意味中ゝふ涙
けまべ。よく氣を為て祝ゝん山い。苦思邪正とおのづ
ゝ。曉まるこの多こうん。抑むし遠金四所繁榮
の内ふあゝて。きの下ゝる米町い。今大松金の本町

石町。あゝひい日本橋最後のごゝいと縠ゝる所ふれ
べ。大商人い彩をあゝべ。まぎ夜も明ぬ彩を送る車
の礦ゝまるさ人も。麻耳ふ泥くぎゝゝ。この一町
と一構へ山て。遠金いゝゝ関た八引。丈羽奚引へ西く
ゝも。肩をもゝぶゝ人の赤れ。大多屋丈右歩つと
いふ限あり。さまべ地西へ百條蘭所。まゝ近在
の田地田畠。質地を續ておのゝゝ流まゝこゝも
歳百石。実ふものむゝ宋の世ふ。石崇とゝる金持

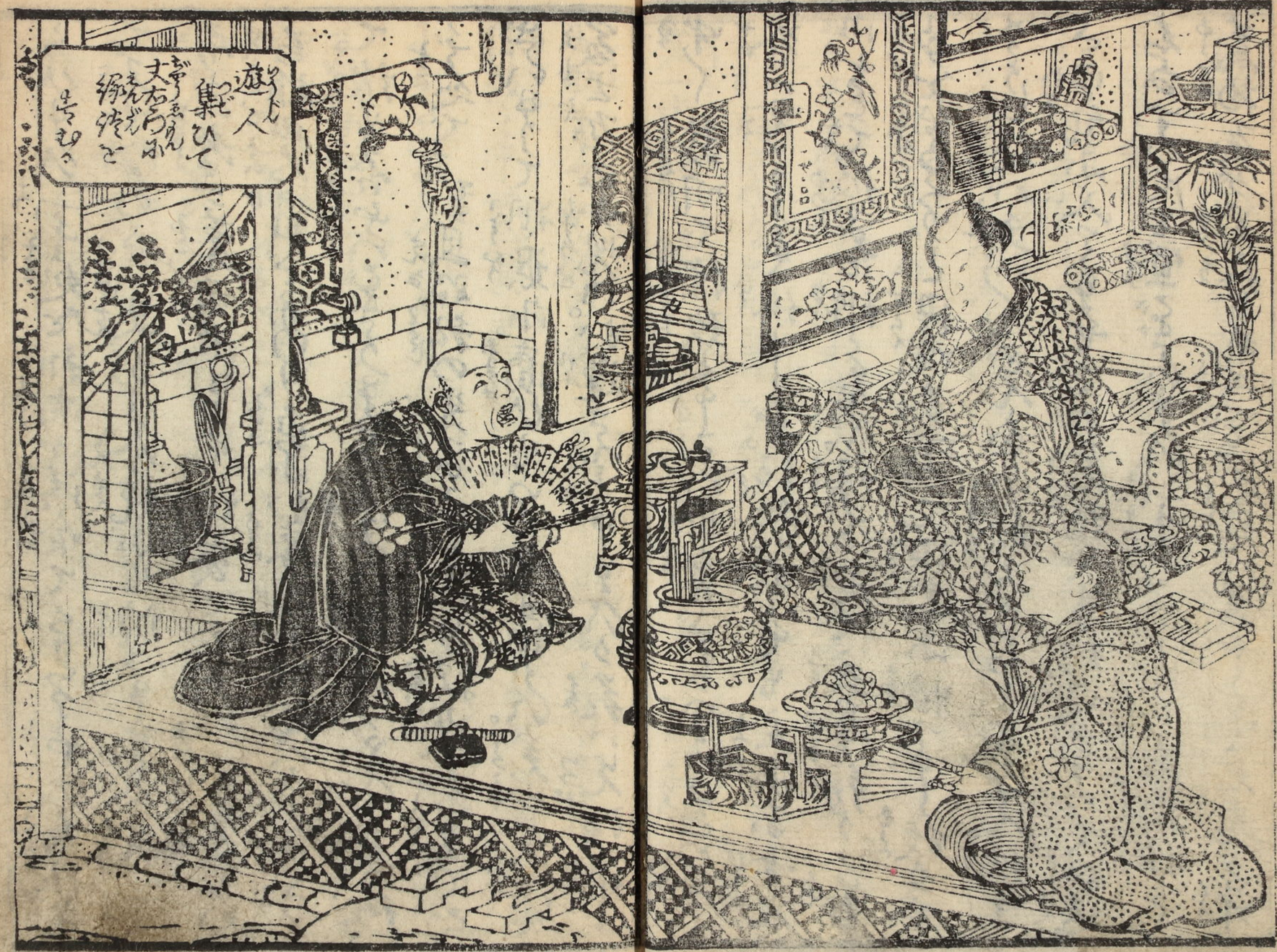
あり。彼が剛小八伽羅を焼き。且孫繡して孫ふ綾ふ。
縫物する。綿摺もおもしろ。とこの一事をもて其の
家の家貴のさまを知べし。さまいろ世の唐
たぐひ。さまふも猶さる大多屋い。元さまつたる
若国山て。かる家貴と言ふ人も多うし。
さるふ今の丈夫つい。近年家絶してその年も二十
二ふ来ふ。ありけるが。縁をして定まる。津家とよ
去もさく然して此き性質まとべ大磯ふ磯の遊
びもせで。況て侍女群女い。多く仕へどもつけで。
明れ暮ふ俳諧業の湯。まさい挿花その服ふ有京ど漢
て楽ことこと。さふ浮るといせば。とふその家の支
配人も。多きふ中ふ茶既去個。家ふとて日月ふ
も。暫しつひて一人ふ月ふ家つて実者ふと。その
浦ふ月ふ比して。桂義とあん味けるが。一時去個結合
し。妻のことを勧めけるど。ずさ書る孫舎ふい心ふ
恨ふ勇もあして。その縁ふ入ふ出入

すると。雖僧所其樂。掛花瓶一本へ。花ホつゝ刺ホつゝれ
とりて。初めんとゝ思ひて。かの女個の美妃人。密よりみれて
彩ひ出そ。かの女個い美紗て。わとゝ人あつせ「モシ旦那
ぶ羅ぶ。ぶゝ美の徹明叡智ホいとそ。美光ホ
チトヲゝゝぬゝぶごゝりまへ。丈ア和尚徹明叡智ホ。
大遠ホ拝あげゝナ。行ぶエ音緑ぶゝゝ拝ゝホ「イヤサ
代でもぶゝりませんぶ。洗方ゝゝ波ゝ。美光ぶ春ぶと
汁ぶでも。丈彩や七彩ぶアぶゝりませんぶ。行振ゝ釈

でぶ絵洗を。ホさゝゝ拝ゝのでぶゝりまへ。丈も相縁寄
絵ぶゝゝ。まぶ光きホと思美ホすゝて。ホ花ホ入ゝ美
やア鈴方もホしぶ。方花もホさゝぶ。ぶ形アゝとア。ど
うも美光ホ拝せませんる。丈ア行ぶとのゝ二服
うゝア方花も出ゝぶさて撮洗い右も右も一せ連
絶ゝゝ見ホやア。心ぶてぶ肝ぶぶ。ぶゝも今の世の
中ホやア。心ぶその若のい稼ぶ。そ処でせ中ゝまゝ拝。
ホと持て且美ホ。心を労ても美の為ゝと思て

まア〳〵又合せて居るのサ「そりゃアあなたの食遺ひご
ざいませんが丈うして人の場で。どりゃアおつてうも
まんテ丈あるまいもそ且那。初おすつちやア仏様で
ざりますも。君光ぶばんど。君光ふいてん。先も陸ち宜
敷寝と中さうてとあおの。百ち一ホも来ませんぶ。
ソレ半ちゐもはなのる場町の義物屋。おすとの女児は
ホおなさんく云て。年ハ大さ十八ウ。九でどりませぶ
ぶ一内場で。琴三味も。もく書かさる。計線も一人あ。

中〳〵幾明で探致ちまぶ。目鼻ぶちいよし色白し。
髪いるうちぶ。低うぶ。行処へ出しても立派な女児
はをで彼ると何ちく。味で歯て立筆動う。男
ゐと答るうと思後おすつて。思ホ悔つ〳〵改めて。
ましし込ぶ丈いく。ぶんおふ教ぶうちません。倘ま
と思ホ入つませざア。君物でもお遣おすつて。お返
ちおすつても宜ぶぶいまん「丈ぶやアちち妻目振ぶ。
義物屋ぶ影ホ。ゐエ「ナニそ処い宜やうホ。君光ぶ


遊人
集ひて
丈右ゑもん
縁先を

らひまん「手処を和尚が清合てくるるやア。有難さ
てえてへあざ「其方ら今晩ふも清どまをうト明と仕
居る一孝が覚示さとして嫁女とたるる「そうやアい
丈えごとけ
ち精出大家ごすの。乗ふ妻ふあげ給へうとやうう
て。誰も否やいござらません。今のい明しやアまんざ高ば。
ざいまして相変ふ。商ひもうさまいまん。美雪ふ清で
家主屋の女児ら。い蓮さんとやまんが。花い先頃絃一
も取まして。其他の盗もて玉川て美用主のこもらも
探致ゝ中さが其楽先生のい新しのも。ぎうう長まう
ふございまんが。糸屋の女児ら。い孫金でも一ゝや
て二ハあるまいと。人も唱るとゝて仕アふ行ふろこの女
児とも。一家ふいはびふすうて。ら境どまも私
が結婚とゝさが世もて変へござうまん。ハテ。ゝやア
君ひの外。武許も美しいのあるまんざ。ゝて。ゝると
自己が宅へ来ゝて居る奴ア。食世ら。の様ゝうらゝう

一個として満足ふ面の奴ァ居ノウ和尚「ハヽヽ左様で
もござりますまいが侍女の業淡ふ見者世界なものゝ
けどもいふ彼の野郎ちんぢゃア。モウ二ム年主人と男
殺しとなる新道ふ居りますぜいヽヽ「左様サ見ふ業ゝ
ちんぢゃア揚枝ふでも吉ちゃア打つけ社義持且移ハ殺
でなく満足ふ面で私へと云ふ仲ヽどうも困ると射し
ふ奥も日後近く今時ヽと業淡ふ見者「且移さ
ふ腹が出来ますと丈左様ふ何で格へると「ハイ」と判ま
まど外ふ行きう拵へて居ますと丈左様ふ拵ど
漬てノこの去先生へも献しるぞ宜「ハイこの稽ふい
ますと一大ふ加社ふくふいさナ。さまでこそ且
孤へ私つて。来年の去ハ自己が引るぞ楽ふみて
後て居ふ「ヨヤ居ふ楽さんざ。ふ肉義さんのある
僻ふ「ナニ先楽さんう乱ふさんみ。あるちゃア去の
年城の晩ふ孤の海へさくと。遣てもまいう
大丈夫ざいヽヽ「孤の海と云ベノウ和尚ふ見根でさ

が門柳亭へ俳諧より働きがあつて面白いやうなこと
都合は鬼の云ふ事つくんと出来ざア。行と其く考へ
さぢやアねえ。俳諧師みなアおもしろがれえ「ハヽヽ」そうやア
きまえ。それのしごろは。考へる位のちへ出きれいとこま
ずえ。ぶが其風とまつ所ハ「こまさく」その口訳もか
陸を行くこと行でもその道へ這入てこまべ面白く
ねへまへ拵へ。ア一番ふ拵えも。おりくひづりへんざ
ア「さあうサ丈もひづりくこまて丈べ限りもも

全体ちんと一枝を折て。瓶に挿り貌ふ方をその枝
ぶりのまま。さまで。紅色を見せて拵えとのが。初やうと
まうしまんが。そまと今のやうふ程ふ曲らう。殊よよ
ると計ぶと言て。撓るのもあるとまうんう。史ぢやア
九で遣て紀師。矢張竹のまと言て。紙で拵へて
うぶ宜ぶいまうすく「義サアこまん樂さんい拵ぶ出きく。
世仁方へ行て。お昌ふ「ヨイく出方へ行番ト
いふちに花者その外の。行女どもがあ三人。ねる出しる酒

と殺家業の家ハ阪のさき。稲荷のあ並べて。六七軒ハ遠ゐる。用て食事方丈と。むうの人も称へけん。この大多屋も七まつわの。奏ハいせゑびるのづら。諸親歌やゝ出入のあ。世話ゝきあもとべとれと且相ゆゝと。稼り城を西名平せの食ハも。二三軒ハ隆ゑゝ丈ゆゝく稼が出来ぞ。サア去先せ例のとわり。其笑めハ祝へけまど。きゑ思ゐ小きて。其お世ゝ世ゝだゐ。ぼを思とするやうゞと。筆決どん小可恵ゞ

まるけまど。稼小ゑせる計ても度ゝでぞうも新遠小居ゞゝまる奴サトとまるゐを楽一者ハ。侍女どもを対角小て。ゐ廊ゐされゐ設まゐられもこの茂の一興ゐ。底接上ゐをなゝゐ

第二回

ゑまを通と作ゑをとハ桑門徒と作むゐとハ傷者先せも家貴小ハ傾くゐゐひ。況て底下の凡俗ハ見と貴をゐハねゐる。ゐ小於て。ゐ場所ゐる。荒物屋ハゐ楽

ようこのことを笑と等一。歌べと大かたあるべし。女児が好
ふもいひ侍せどうしと思ふ。墨筆書でいかいう。り。筆
いかのはずでも。見まぎふ屋よとおりふまでいもくくとて
その日を後つさてこのあるいの好い年の比。十八九くらき
楽よう。稲込ことどその実。二十の人と二つ二つ。紙
のこう人をとべ男を扱ふこと人をとべ。かの浦実の生
涯ふくまで。顔貌の美やうさふ。年も二四五陽とよう。
されべ雅家へねど。彼処へ参べ伺ねて。物ふ程
又更ことるすりう。親ち何くまで尾せんと。年ふ仰げ
ぬ華美衣裳。さでわざ見れを前として。十六七と
も化さん心ちと彼美やう山路なる。糸屋のお蓮ハ摘枝
こそ。かねわい些物りもせず。名ふ彩りて蓮糸な
ぬまと。かくく大家の新婦ハ。ちと向ぶくれ風情を
こ。稼て一者い初方ふ。親ふも学るとい人生せ。お蓮と
も屋敷し。扨てのことを理給ふ。たくまでい先の機ふ
いくど。貢尾するとくく親兄弟。一歩養ふ浦む。

大事の所といひ使せ。その沙汰を後けるふ。須臾に
月の中空ふて、清の光いひくるほど。ほの方のふもとい庵こ
め。少しすぎて枝ぶり。まご数ある梅が香と。ゑえ入
堂殿うるく。庭の弱まもえ出て。まの乳色も清
その人日和もつぎ拵う。とかの大多屋う案内むれ
ど。二人の時と猫ひ飾て。そ楽一巻そまくの孫さし
別ひ大多屋の裏の方より除と入をべ。その一家の人さ
へも。知ぬあり知るあり。かくて丈夫つが指揮ゆう

一口所ふ亜のも知らと。まぶかぶ南殿表居う
些離も。庭ふ鑒ふ泉水ふど爰と手あるふ所ふ亜。
ふ蓮ふ居るう北ふ面う。庭ふ常盤の松の色。ふも凋
まぬ冬野松。英揚山茶花ふど極く植て。ふと爰る
所ふ。きふ心利る仲居の女ふ。侍女二人ふを使け。家の
亜物ふ。ふ化の。時てつけ家ふ入ふ。ふ待ふ入ふ。ふ
あだう。ふく。だてふの家ふと。類ふ使てふ居う。
かくてふの孫ふたうけ。ば須ふ親ふ。ふ稚だう。ふ立

きせて侍女ふ。ろう運ぶ。ろう南紙しきの。おねが方ふを
楽と煙草入。を人生方生つへ入来る。おねがつをまとこうえは
ようも殺ちく如逆へ一種ふして傍ふ居まと。手楽を
おねが側ふ居て「とまとへ様く。お嬢をいとしと。おねさん
と平仁婦人。ぞうぞ山来お目をかけられてやさうも「丈
振うびまとまと逆くふ。嬢を手をせう。サアおねと申し此
方へ来ふ。和尚も今殺へ一つとして。おまつと逆らで業ひ
て人。初へ伝へ訴へ其一個と。お嬢もさぞ驚ろ恐ろう。と

方琴や三味も。よく出来るとをとッけ。こまく死長
仕家てある三味を持て来や「ハイといひて弦て弾サ
行ふ。ろ指ろ。「行でも結ろ酒の肴ふ弦ハ義絃
も居るけまど。おねさんソレ且ねへ「アイとひて侍女
ろ酒肴をとけどろ歌とする「下キニ」おろ良色の家ぢ
ヤア客を客ろいろ法度ぶろ。喰て人と呼ふあい
客を客ふ。ふ喰ろぶ。美ふめろて居ると方
で骨ぐとまてあろれ「十二月を客いとません丈

ちゃア吸物でも吸ふぐ宜ハナ「サア」おはさんもあんも
せエ実ハ且那ハ〳〵〳〵云て堂〳〵恐る人ハ居ひサ
ま処で是花おんざア。左〳〵恐ル涙いう。どうも此ふ
恨ハ和人〳〵又〳〵和尚ハどうモウ世を恐して〳〵まべば
宜と思ハエともあるゼアハ〳〵。あて史でおくつちゃア世
和人山程お甘味くれ和人めんでも。桁角喰せやうと思つて
堂〳〵〳〵吟と和人と乳ハ有ノト是より盗嗅逆代
き〳〵宮で次第ハ教も堂〳〵ハ。千〳〵楽も今ハ十〳〵辞

て「イヤ行ハの名ハう〳〵法ガ来てゐる。サアおはさん行
で一曲〳〵云てもまい面目のものハ寡よおもち。矢張結
ハう〳〵津繰う。但ー今流行るチョン〳〵節う〳〵「この比へ
おう奥ガ流行ますれエ。矢張結唄ガ宜ぐのまエ
一波も今ハ大ぜやうで。諸方へ師匠ガ出来とさうぐ是
も大ぐ流〳〵一流ハまうも者と和人「ちうまん位う
今で芸人狭ガ遠人のと宗流ハ。昨ハど流行ちぐ人
まん人お好い藝者でもしてゐる「イ〳〵五十二稽古いう

ませんが。ホンノ独ごとで世ぢう「行ぞ」為ないのと世
て笑せる。中ホヤア陸ち宜のがあるぞ「涙よ出来ません
けまど。行ぞ深ませうト今まで細るも二人アの色者も
柄郷ちうちの一曲丈を歌つの中物まて肘と杖ホ暴
物びの「どうも結唄ちつの奴ア。行処う呉ホ宜まんぶ。コロ
コウ為次。今度ハまま方遠へ。お路一つ遠て来て呉ホ「サア
お遠ひ行ホませう「私い遠ホ心ハ為ハ物ま
ぶまが。為ハ尾ぶう。そまで来やア表ま。ちうど

ざのまする「ヤア行でも宜ハるト遠出ハをうホ心付て
ちう楽ハをを人猪ほをき「世処ハこまで宜けまど。大
うと一者が先初ちう。旦那を後て。周り切て居るぶちう
モシ旦那ちつちうへ。参後いちうちやア。行様でぶぶの
まん「左様さノ。自己も大きホ辟さ。勿論万一ちうう重く
ちちちう。自己ホ構つぶ先へ指ちて。食ホも欲して呉と
一者ホ出ておちうう。周つてあるやどのともある人「ハア
そまぢやア仕細ち。ちハちうめさぶ遠ちて。首と表く

其樂
於好
大多や
来ん

まで居まんぢらく。手後人て来うまをうトいひて立て
手処ハ居る。往女乞食ぐらをして。廊下伏ひと泣んまする
「アレ手樂さん行とおぢョ。ヲ姑様へ「ナニ姑様人と生で
もいまハ山るも。墮落ハ居ハおつて異と云さぢやアわへうト
あなで来ハうう抱踊ゆると「アレ」手樂さんアレヨウ月
と一生懸命の契を立て「ハ〳〵和尚どうで来ハ悪い恨
いわへ。ヲ乞食強〳〵い。手方もナスナ六ハおつて。行ぢ色
れのわへうぢやアわへうう「手」でも坊さんの俳ハ

ふぎけまんあヨトを立ぢうり切てピシヤ〳〵と。手樂ぢ居
と七ハ八ハ行ぎうう逃てゆ〳〵一ハアぢうも移遊ぢ。乳の強エ
の山やアハ立まるト猫ハ立といひたぢう。畳内ちつうう北
雑戯廊下つぢきハ続へば。一者いきやまハ撫踊で。舌も
チトまうう紋伝「ハ蓮さん音俳の残りをカウチリぢアハ踊ま
て猫いハ。せあて生手陽ハ。今ハ人ハ。今ハ人ハ。今ハ人ハ
てうう拾へ。其面見ハ。ハ人きやハ人ハ。ハ人ト強つけう立
て「蓮」音俳ハモウ。最ハと結まりまョ。行ぢう新ぢ火ぐうて。

さぞ寒くおつらうございましょう。傍ふる侍女の方へむけば「イヤ
そんなでもございません。一巻さんが被いをなさいました。モウ一つ
あがりませ。」と三杯の茶を飲て「ヤ
ざいました。」と問て「更ちょう一巻と寒うございましょうト大きな袋
でつゝむ。惜り「ヤ旅ごとに忘つゝ手樂先生の杖ご工合
秋風ふいたら人は茶碗いれ枕屋理屋ちゃ「トつゝうけでまあ
つゝ人が。まご被方が門ぶれうと「ヤ皆ご惜ろと
つゝ人はなごうゝ。お蓮さんと対せで。ヤつと祈ご先いあご
ぞ容徹ひゝうが大敵打チト半先小敵ごまゝ「イヤ
ゝも先刺ゝ無張一個でまく注目サ手処では方
の巴動静ハどうしゝと名つて窺ふのご全体ノウ一巻さん
刺巴二人とも同じとァ世名ひつまご恵うつて張小寄
ゝ世方へ巴出がれ人ゝも考ヒ不せん「左板ゝエ七目
ぢやァ被方のもう小大分面白ごうあるとえゝるゝ「三
左板でも枕人が今拍唄ゝ行ゝ拍まつゝのサ「一巻さん
丈ぢやァ且羽ハモウ出ハあうまんまい左板ゝと云て

今こゝに居らるゝも若いうち今教いこゝ油ならうアモウ
雲い事と絡て行ざうお板が霧屋でつけ玉い事と持て
も宜らうねエ「お孝」お拵サ仕様長エうゝ。もゝいよくゝお出
ぐれゝと拵つやア金井ろぐのサ仕様ぐる先生その面
ハ。まぐ宜うゝ考まゝ考へゝう「お拵サモウ大概考まぐらう
ドレ一盞頂いて客様が勧物を見て来やう「お孝
おらうゝ考拵して、もゝ長ゝ系せエその釈ぐうゝ拵へ
うゝお殺もこゝこの面ゝ洗でもゝい著ぐふおくぐ

つゝ。ち出ぐれゝとあうやア。お敬の子供等ふも結させ
殺ちて、お蓮さん拵へどうぐ。行まゝ。お蓮でも拵
つまゝ「行うと絡ゝゝお板も宜ぐる拵をゝさゝゝとい
蓮様も。悪うアありません。ねエト世ゝ仲居へ御ゝ立
鉦の准彼ふとうかゝ。表下ゝ楽ハモウく欲ぬとぐハ
ゝどゝゝアの絡。まゝ但ゝ盞ゝうけて「丈まゝ一者さん
彼方の勧様と。ゝ後ゝて来ゝ世ゝ「行平」お新と
まゝしやハトつまゝて 塗ゝ手処と出。廊下つまの南れ

雑談へ夜更しバ何時しか三法の音さへ人絶て障子ハ締
きりて出ニてしまて燈火ハ。モウ行付て一個の夜個の。房ニ
入る動静ありしハと途く〱一時ハ今ぞと待こ
と侍女どもが又ニねり。彼ハお好が許ニ入らりと遂人
続き鉄びてまさこ立帰り見を春こ。房の中ニ成実
けり

嵯峨の仮寐巻之一終

雪の曙耶麻

嵯峨の仮寐巻之二

東都　松亭金水編次

第三回

春の夜の夢ばかりなる手枕と。詠に古人も詠ドけん。現ニ如月の中旬ハ春秋二分の時ニして。昼夜等しき長さと云ど。夜ハなかく〱ニ頽ゆや「ア、辞て何ニ申さうでハ。一條入相の鐘しさ「モウ何時ぞ「ハイもう子刻経でござりまする。霄ニ坐せ長根法師出しける。古い火

鉢ふかも堪まして。乃酒もかい穀もこう寄ていきまして
モウ一盞めあがつもまいらう。亜孫へてあげませう「丈右衛
門」ちゃうど「ナニ」おお祝こまでこうのう。孫は遠慮
いたしません。サア一ふく召むづて。世ゝ待あてゞせト云
ひ煙草とつけて出し。横を這出て設きつけ。淨瑠璃の
てまを覗し。次の間ふあるゆ所の火を。かき出して帆立
貝。その煙草盆さへ近ふあり。焙も出て来て。
拵へ「サア旦那出まいさ」「丈右衛門」大遠ちやいノウ。何祝

ゝて。おいの長祝。義用ざ。例義所へちよいとこの
と。分付ても。ものがれて。モウ。ふるる。ゆ。ゆ。
て来るのサ。イヤこりやアあぬ〳〵ト家の上ふ紀ゑ。
女細の他ふ人へも。かの廓中の陽よりはつる。まつる楽
むそのさまと。揃つあつ祝を丈右衛門。とまで上ふ
き面白さと。現心もおきまでふ。砂つ砂へうそかつ。
夜の更るとも。ちつぎりけて。其楽ゝ隣ゝの外ふ踊
こそ。この勅諭を篤と。きても。大前尾と。

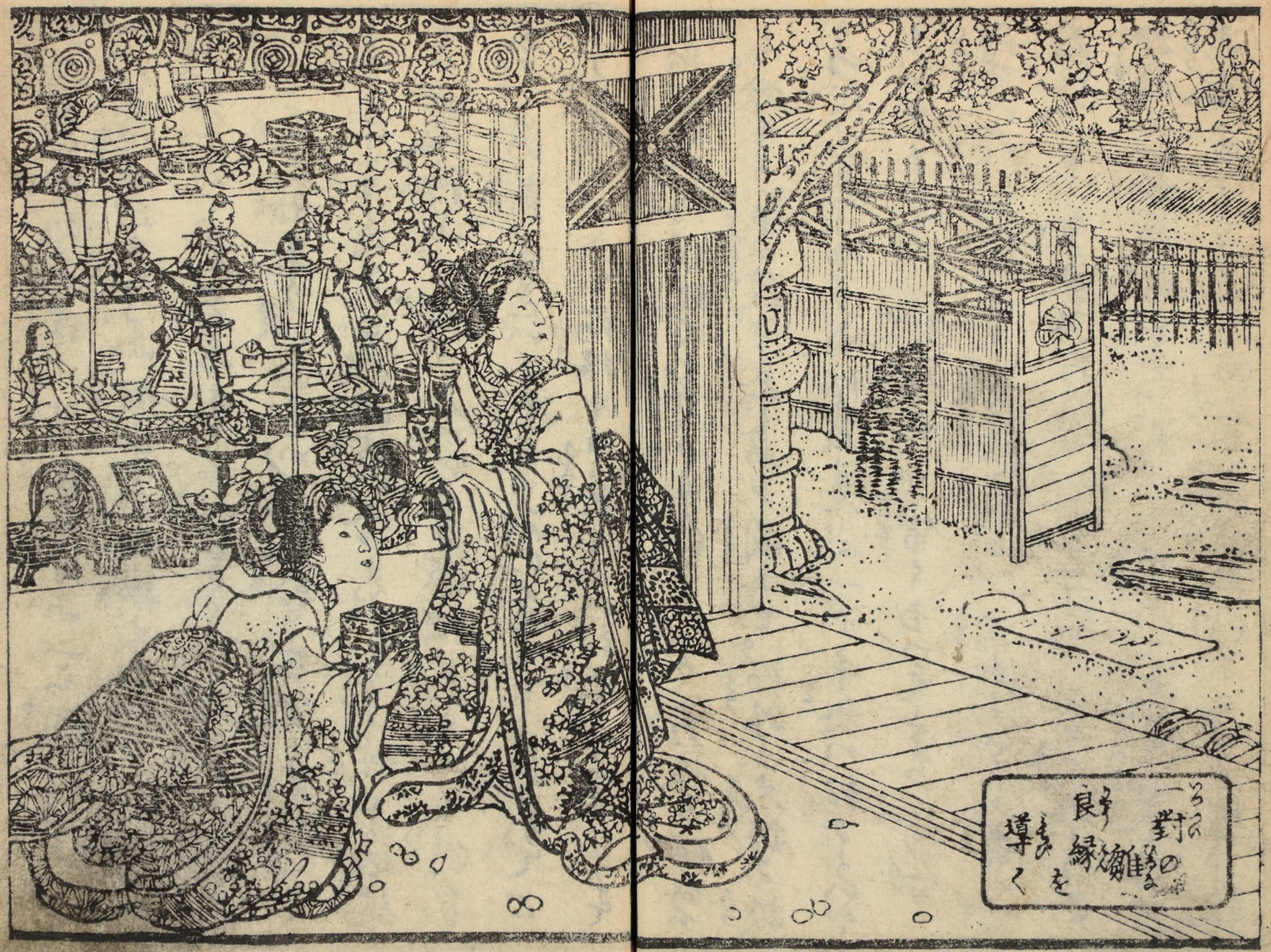
の中に散びて。かの此雑賀へ来てみますが。待合刻て一巻
は。時を枕に寝所びたり。お蓮もいつも常に得意。搗
一手段くるくと。腰を巻つけあるぬく。茶漬を人喰ふ
ましし。簾を揚枝を巻つて居るが。ア゛ミさんとらんまう「甚楽
さん。お出へあらまでまい。今もこの女中が来も上の
間に寝てあるる。嫁くら宜しくらひますけど。ますぐらし
静のさまいのに。寐て仕舞も悪いらが。おあの様
て居るヨ「さぞお侍をであらましてらうヨ。音縁も行じ

て、お蓮はうろうろと大きにあまを取けれど。因縁も
今夜は大道に。お弾あまつて昔がつてどざろう。お料理なぞ
傍にお蓮は中でも揚はあんびアアく静かにお嫁がいでと。今はお嫁
してやて来たはらく出放題茶目に合せ「左様してみますが寄
も更にうる世辞もなやくは嫁がつて一巻とも揺起し。中居侍
女どもに。世話をあしらいお蓮と嫁をつうまりくと懸させ
て。其より後一巻其楽で嫁御結あるる。年増らち
も勧めらて。お蓮が方へも太鼓持の来るやうにおしけれど。

右大蓮華の御手水鉢。丈六の御つが乳ふい恨つべきまでの
ものひて始めこそ。毛拳動とも花は見どころ好もきの乳
ふい恨つべ。今一ぢん紙きこゆる。如もぐるとゆふて。
てこの月下旬ともまれ八稍春色と成かして。日も暮ふう
ちかまこと。ちりつもわうつと実花をこそまれ人もうれさ
つぎうり日もいとつもう長けまれ。去年よりして流れ込ぐ
る近在の田地二千石。絵書物ふて右まてい有まと。
えうふいうきぬ節。近きふ巡のとあるべと実右まつぐ

つのふいうさぐといひて例のぐく。供人の准備させ道の
程の奥為けまバ。其樂とも体ふくと。頃ち如月の二十
八日。遠金を持出て。国主なる陶後の殿。見物
の下知。田地かるとの子代の業内ふ。大きく巡て終り
貝八。初桃の節句にて。殿も同ド御入。中ふ富
家とこそ。蒔つ立る雛人形より。彩の紙屋ふ
るまで。手ふ手と見ー。金蒔絵まで。ふ高蒔画
王侯貴人の祝ひと。又ある方の在さ。拙宅の墻

ちゝ又さえ遠くふそ。丈夫嘉つハ元ーとまり風く程の体
と又て。素内の子供を呼び「おくの宅ハ大毒ハ。そまと
ちやア垣根まんざア。陸奥稼ぐ程のやうまハ中ゝ
一通りの農夫やアれハ「ヘイ」ハ陶綾の美玉清
とまりして。ゑるも千石ばいも豆も除祖ゆう。まア此色
ぢハ大ゝとやてをうまハ「ヘイ」為稼ぐうを処でいと。
その宅の維を又ゝ及まんざア。手方働らいて其ゆ人う
「ヘイ」そまハモウ仔細どざうません。大の所も実張貴
表さのの。田地でどざうまハ丈ゝ左稼う候ゞ
ら。除まうゆる殺さとちやア国らせ。何稼う大嫌ゝ扱
うてぐまとやうふ使度ゝ「ヘイ」を処ハ私ぐやや
うふ中ゝまうト紙入ゝしゞ。皆くわつてゝちゆり「サア」
地方へ入ッゝ安ハ。勿論庵口と用まーうゝ安壁
表ハへとゆまゝ丈ハ方稼ゝ「ヘイ」ちやア何ふちぷア
和尚ゝ一所ふ表ふせ二。ゝちまーー解まう大勢遠入ゝ
遠表ゝうゝうゝ表ハ。切手の利ふ表ゝ置ト報


一対の鴛鴦
良縁を導く

人等はそこを処ふ遊ー。甚楽の他ふ二三個。引つれて庭ふ入る。但きとうとうふ 假山泉水。樹木のかをる石燈籠も。若さひてえどころあり。私ふ〜うち人等去清ふ。

稽と名て出来り「まあまいく具合さ宜ふて。いつてはいらしゃ。ザヲまづ此方へ入ッまへまし。私どもの庭とゝせば。稽ふ一変ふ入いらしゃ。法華ふて清ふ。

あく。この節ふまべこそ第ふの色。まこと一ふでどざりまんぐ。イヤハヤ伺報も実ふ君ざのお眼ふかまして

あいどぎりませんぐ「ちく〜ちく」ちく拍子ぬ。樹木屋どもが来とかへて。稽〜ふ遊つてくりり。都て緒の拍へ行ふ甘美ぐある。そして此処ふ居ふ出ふ見ぐ宜ふ。トキニ四五人今日押ふ小。大勢集つて礼の毒ぐ。実ふ孔ふ

えを所。紙障ぐ立派ぐ。そこと名渡一見しさふ。

まこと入ることとく釈サ。モウ笑ーて構ッこまりごョ。そ処で

その雑き衣と。篤くりこせて。お呉ふおせエ「イヤモ無茶ふ木

偶人。ちく〜衣個の女児どもぐ。朝小晩小拭摩ッて。今日ち

まと茅の巻。かして行う的騒ぶ。いとこと積つておざ
つまませうが。根ぐ宜くどぎのいませんうう。乃境の甲愛へ
どぎうません「イエ」まふ左指でれへのサ。とうう上つて
も宜しいうる「よう所でべどぎうません。サアまうう指で
まうトかの掘類の階う。対愛へのまべ驚らうふう
二間ぎうの雑陵ふ。あえひい縦る掘く絶。古今綱の幕
おど。ええふ打つめて。藤るもいのく古今雑。さて
乃異うう巻笛長持。形紫掘を指めう。手陸の綱

殺義百石。所せ元まで並べて。鼠綱の菱焼大蛤
栄漂揚栗厨斗昆布。さて徳騒ふい粽の心伝
はくせ軟立ぶまや。行まうちく彼へてあう。丈右
志つい精くえて「イヤ行のとして立派ぶあど。志巳容微
どあ心ぶさ。今日い茅向で女児乃ちが。折うく指ぶ
とつく処と。形邪鬼と入れちゃア。まで今次ち筆の
天宝へて拭ぐ五六筋も。かつさはふんざノウ和尚。芋早
く出うけやうう「実ふ左指でどぎうまん「まうく宜

あるごぜのまへ。只今おまへと一ツ献じやうと。女児ごもが
まうして居まへ。おうく帝ふを拭処ぢやアござうま
せんとひく其樂ゞ袂をひく其樂いとうえ身と記
祝うと。覚兵衛ハ小勢ふちう「実ハ之邑小茅場
とまうして。凄うう絡うぐうまへが。今日ハ長月雑
さ会の巴光ふ。二段絡うせまうと。先刻ハよう
て脱のと。始める所でごぎいまうぐ。且ゞ入ちつとの
で控させまうとユモシ行もい居ぐ。一段絡うせてハ行振

でごぎうませう「ちやアを分頂ぐ女人まうトい
ひやうまと低絡べ。丈ちまつハなの乃。行年ちの
とつふう。俄ふての西面へ燃ちるぢうの毛穂敷
きる落後の見義ふ。二度ど居かけば頼てちゆ
茅場ハ。年丈二十の上と絡て。少ー茅ちー気ちゞ
ら。匂ひハ迷う素勢ふて。人ふ一絡ちて。踊うつで
きて大振神経の振振も柳嬋めうぐ。ちの上ふて野
丈ちめふ。ちの人ふも長うべー。振行ふ載ちる天目

へ。右手と肢てすらく五出流ぢきて丈夫ふつふ。さ
出せべこまいとつひて。把ろ折ろ逡巡あふと為て一
待ちを。業下見長湯も為ふと突き「不朱ぐろ
恵頂女児の。橋ふ中見でぐろまん。お語あまて下
さうまし「イヤ右振ろ又こまいお初ふ。今見へ不気ふ推
ろひて。雑ふ女の形麿とあまーこ。このお茶ハおあのふ
まへろ工四ろ人もて楽ぐふ「イヤハヤ稀く世渡ぐあけ
まして。楽ふ訴ぢゃァぐろませんドいふろうまも大

振紬。桃の節句の親武ふや茅も少世も燃ぢぐろ。
折家ふ載ろ男古の四ふ口板巣ふの登ふ民間
き。見もまろ暖巡。為ふと衝て一行ままべ。見長湯
もまろ為ふと衝き「こまい次振ふぐろまん。全体
布ぐ結るの神ぐまぐ。麻耶とつけまーさぐ
羊ろまして。為人ぐ。紳ふ布ぐとやまて。為ぬち
耶麻とまろしゅん「ゲァ右振ふ立つき為ふも。お麻耶と
いたふ振ろふの布の中ろぐ「サァぬふ。お慌しの。浄ろと

あさうませんか。行べ遅日でもモウ夜見。中刻迫くまう
ませうゝ行で穂坐しませう〳〵とんまう茅場さん
お預ひ中し〳〵支ちやア先刻の四海文五。今日の事
てぐらいまする。山の段のロふいませう

第四回

さうあぶふまい。山い。姉のお嬌ふ妹のお耶麻けんとされ
とぞ美性繁まる。ふうの秋とうき食せ。孫まおきて鏡
さんいと軽盈ふ整頓て。堅しうさ女へ老山の。美の姿安
も行のあうまで。殊ふ待鼎半下女まで。ふそまうくの
衣裳ふて。左右ふ浸ふ居ふがれて。桃の節句の雛
祭う。現ふ妹山と撫しうて。こまのさい西面大多屋丈
右ふ。仮初ふがう藤波備又跡ふそいあうざまど。
今と壮の美春良雄ふて。女まふ狩好うま風俗。
陸奥紋ひふる手代ふ丁稚用き天宝といひふがう。甚
楽い風雅の乳頭ふう。傍ふう人の美衣淫ふ。まい西
男ふ秋しまる。家勢い大事ともそ。稀まそべ。かくて社

ゑく清瑞璝ゆ。年まべやの智ゑく。業傷ゑぞ
休息ゆと。入ゑる時ゆ姉女ゑ。撥ひて持出ゑ大廣
蓋ゑ中ゆ居まべ結女ゆ。次第ゆ運ぶ吸物稽ゑ振
ゑ紀社麦の休息「コロ」くゆ出ゑ人。ゑまぞやアゆ物米
ゆ世遠つと人「ゑゑ」イロ行も百姓ゆへぞゆうませ
んモ京色ゑ躾ゆゆ。米表ゑ処ゑ宜やうゆ。ゆ執
ゆと紀ひまして「ハイく」畏つまりと結ー私ゆもゆでゆ
ゆ下摩恐ゑ入ます人「今日いつゆる日ゆ。ゆ人も嘗ら

ぞ且ゆゑ麦ゆ米除ゆゆゑゑ。ゆ笑茅ゆふう
まして結ゆ有ぞうぞまべう。佐どのやうゆも
ゆ餐ゑ。ゑーゑ存ゆう。ゆ振も孫金ち
びまして。行でも名山ゆ名ゆ食まべ。ゑ処ゆ郷の
珍方ゆゆ。ゆ兎ゆすゆて下きうまー「ゆ振」も
左振法作ゆ。ゆゆ下酒ゆ孫金でも。容易ゆまゆや
入ます。モシ且ゆゑ麦ゆ。ゆ鯛と田境ゆう。鮮鯛歌上の
ゆゆ。ぞうべ。ぞうと一折で。ゑ千ゑゆ。ゆゆうまべ「ゑ

桜サクラやアヤメのおもんざ。サク〳〵そこ処でも橋もお
耶麻も。そこ桜ふめらしてぞうり居おいで此方へ来る〳〵
ト酒でも絡あ。コウ和尚さま〳〵ふ。取て来ておくま
「こりゃ〳〵おまい女中元い。左様ましても急ふを發
藤おさ〳〵くんが。エさ。まさそこ処ふ千美元屋の甘茶
があるで。仏様も定章ふも。出さま弥へ所がありまん。
「こまこお橋もお耶麻もお若さ女のやうふ。そ居お
いで。チトお敬でもしてあげおいう。形ばかり大きくても一
向汲ふ立ちませんハ〳〵ト此〳〵ちぐ〳〵殻も出盛れ
数年あまこべ。八〳〵七八分の蹄を呑ふ。ろ潤春の日
の長けまこど。さや夕陽洗〳〵として。銀燭輝く紅裳の
袖。紙段の珠さ〳〵ふ。燭蓋を洞いろ〳〵ちく。怕明
まで。ふ題ろまこべ。採海棠桃山吹連竟椿の紅さ
へも。色〳〵紅色の絵かべ「イヤ一向紅ぶ付まんぞ。茅
場と中もこ人ぶで。一表盃陽せやうぢやアおいろ。ノウ口こ人
「ハエ左様あ〳〵ぶませうう「そのこ〳〵茅場さん。オイ清る

てのお師匠さんがぢく〳〵こゝへ出かせ女ト雖と行れの大きな
袋等持ち来れ示すと。出来うてこゝ処へ居う〳〵食さな
冥ゝうちあぐらはし「ザヲ此処へ出持合せと」「ハイ」こゝ
ませうまうしかもえ来えこゝへ入ト把る烟酒瓶を押へられ。ぢ
れもたもと法らまて「男ふまけまん」い雲廻。そんなう
出ふいてこゝれまんが。乃返採とこゝまんトう滑車年女
のまゝまゝ。ふ。打て搗ゝ〳〵料理の張や。浦嘗のゝ
ぶ蓬莱ふ。拵び〳〵容へまゝ拵ども。あゝ花とあゝそ

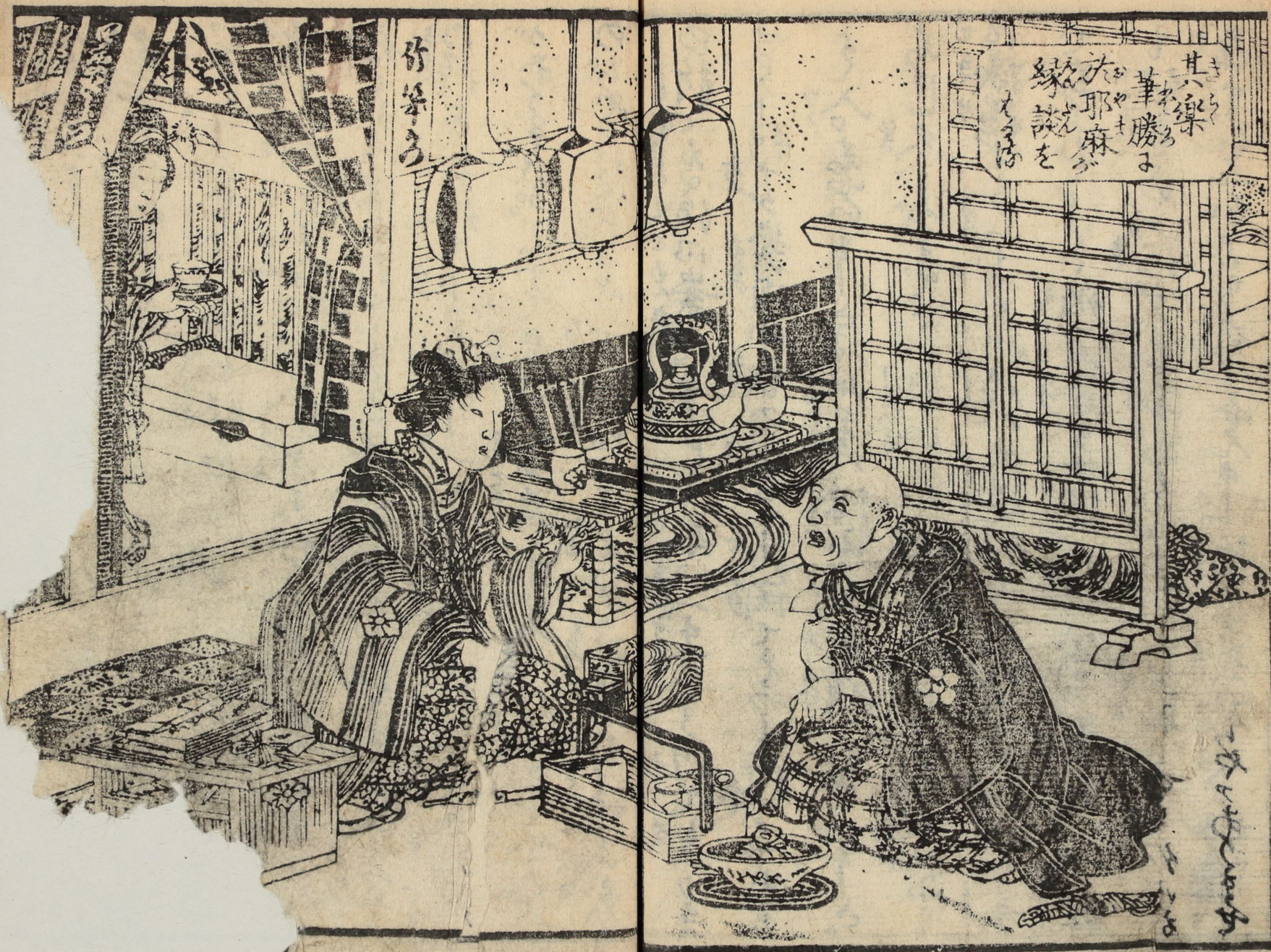
ぬ花ふ浮まてゝ従い。「ゝ」ゝ乃きゝ人宏ゝ大酒嚥
ふ小孫文ゝ赤の内丈赤ゝ赤ゝ花ふ
長居ゝて家内もさこを逢戯ゝめ。去来帰らんと
云けまゝど。猶食まゝでいゝ二里の行程。夜ゝ行ゝ殊ゝ疲ゝ
ゝ。さまゝべこの者ふ旅食を索め。望ゝ来ゝゝ帰ら
まゝで。いゝ汚ゝ〳〵有ゝ。苦ゝ〳〵ゝ一回ふ泊
ゝ人と覚ゝ清ゝ。ゝ人と連続ゝ。既ふ泊ゝゝさゝ
まゝ。夜明ゝ欲とも仕細ゝあゝ。ゝゝまゝ。ゝ赤も浮容

て除くもあらびぬ。この歌舎で美濃しかくて
の歌も明けまべ。朝晩も果て夫婦つい。芳子家父子ふ
待と述べうとと立いで借りつまて。洗食へ帰つりぐ。お
懐い耶麻ぐ侯いこの頃来るいおい蓮ぐ。比ひうと遥
小信まう。渠等両個の中あるべ。渾ふ新ふおひとも来
いあうど。といく中ふも妹あう。お耶麻の方うを拝まうれ。
幼年濃紫ふ入まぎや。と心ふ深くいおいくども。只級初
ふうとう女児と。如此ぐうんも行ま。渾乳と人の繋らんう。

殊ふ彼方の心も知まぎ。おづきの容を探らんと思ふた
小社二綴。まう。鮮菓子結前菓子。その人名代の安宅の新
その外鞠結まう拵ふ拭ひ。沖元綾白粉おんぐ。竹女達
も家くの婿女ふ。頭あうへてよと思ふ心利う神居の女。
よくつひ合あて彼ふうて。かの恋ふい長持一掉。神居ハ戸
のかるふ。家せふ彼男二人とつけても。遊廓ぐの人地すま
ぐ。其樂と副の便ひうて。陶綾の郷の覚兵衛絆。おむ
うせうけうふ。覚兵衛父子ふ出むうへ合ふうて。紺乳の

品く痛と入る口接拶と。仮ひの女いくも交まり。そ楽い
去の頃別深とおりて。心易さもまと別段供の男の二人
まで。待く居く歓待う。其御兵楽い第ヨ小接貝去く。人
の目色で心を焼る読しき性のあるまべ去の紅丈まつ
胸の中と。大とい推察し。今日の所の名吹副小。城すも涼
き心とい察まるとのかるまべ「主」茅場さえの宅いい行
処でござりますナ。わく用ヨもあり世るの接拶小。今のうち
付て来りませう「イ」亜そ処でござりまんコレく利十や茅場

の所と名後乃業内まりして来い「丈まく」付て来りま
せうト利十ゲ業内小表の潜ヨ。用てまつ見べ「まく」まア。
ちく入ッまいまーさま。此ヨ「洙ホモウ」。言葉といくまーさ。
まこ久ーぶりでよの縁延しといくまーさョ。まづ見松も
乃様搭ちう「イヤモ」彼時い大造酔てる。寝ろされとのも九
でまくまでサ。く彼ヨまちやア。陸蒸いまア出来わく「私」
も注意まやア。行ぐう茅中小まりまー大見松さまも行時い
寝ろ。そんおとも寝ませんー。極ちゲ知いでやアありませ


其樂
華勝よ
耶麻
緣談を

んう「ハキニて
遠方で役利ぶ悪い
ついてい[illegible]せ人とよくこの報を
懐ちゅうもってそれへおくれ山ぶ
ねちゃんびぶ法ものおりぶごうごぶいの人。どうぞ君ちゃう宜
おれ法れを。法師てやきの事「ハキニ菩提さん新入て。四相法
がおくまんぶ。ようて五郎の蓮ふ。ぶうて。ちょ人ちゃう
のぢゃわ人ぶ「ヨヤモニ「方」左拵ちゃと思うて。世のうち悪しい悪

とうちゃまとョ「ちゃう礼休めと初ちゃぶ法よ為ェ四
上ぶ。そ処でる菩さん初ちゃ人紙ぶ。世人且ぶ不云とお
ぶうて。ぶえ云ぶさんの女児四とも。支細ぶうぶ又初ちゃとちゃと性
悪のやうぶ。実ハ妹のお耶麻さんふ。前ッちゃみちゃう現屋ぶ云
ちゃちゃぶ聞いお方ぶうぶ。四へハいお出ぶ。ぶ法へぶ。そ処ハ長
老ぶ牧年の切で。又接ェ方ぶ遠ぶ。そ処で。ぶ様ぶ後児と
。相法ぶやァ宜けェど。ぶ婆ハ様さんちゃハ後遠ひで義理
ぶちゃとちゃ人ぶ。ぶテちゃと様をぶ。まァ三人も同拵

家。大家の大多屋へ嫁入るのい。新吉おさうふ遠へ行へ
左振して入ること云ひして。疎ぐ無味うけざる。此処ゴ女
行ろうの。執向ぐあらうとおりんのサ。行平華傷さんお
あの狗で。一巧夫して。お異おせ人ト笑て莞示「コヤ来ぐま。
吾俗も的吉利左振の容ることえて取らいお振と
相巧ご祝工「左振ろおもも左振ろ。若夢人の眼境へ
外れれ人ノ長そうやアおお振のおとおる毎ろ。耶麻さん
い義振ぐらいめ。どうしも〜姉さんの先と紙て。縁付

のお気きひろ。サ。先さ女ぐ宜ろやア宜わど。振〜承知
いあうまんい「おおの考へも矢張左振。夫ぢやアまア
どうしさう冥らうト。つまて指く考へうしぐ「アノウ
むうし行ろう。唐の王さ女ぐ姉妹女個おぐ。屋振
ふおすうとう新を笑ます。大多屋さんも出大家
のう。お女個おぐ。おう」九と。
「そうやア二個ぐ二個でも。そ処ふ少も行細の振へぐ夫
やア学人来さんぐ不承知ぐ「十二そ処いまと吾俗

が太鼓の敲き方がわるまんぢう。かち拍子ハ沢ふむ
新しをあさいナト其樂ゞ耳ふロとゝせ。氣格らく続ぎ
ものがたりく其樂ハ点ぢて「そもぢやァ今夜泊ること
して翌の朝飯ふる「アイそのあらかぢと云て。吾衛ゞ
そもへいきまんうゝトその段取を濃らひけて

嵯峨の仮寐巻之二終

嵯峨の仮寐巻之三

東都　松亭金水編次

第五回

雪廼耶麻

さいハ橋ゞ名舎ふりて上の間十畳次の弓六畳。然の
ニ畳ふあ弓ふ。上の弓ふハ琴ゞ山法。あ弓ひい菓
乃具。盆画の具。花瓶ゞ好ふ住ーて。新形ゞ文様
立さ也。ゆゞ弓ふ。ゆゞ弓ふハ並べて。こゞ氏膳ゞ好
ゆゞ。二弓とも漆ふ。徒ゞいゞの異地あり。父兄云淋

いとこ人来て「ハヽアお憍ぐまと並べさ。人の来る所でおーとも。坐かるづけて。並べ寝。ドキニお憍。其樂宗邑ぐ。且羽の俗云ぐとこ云て。姉妹を近く小。瑞金へ遊ぶ小。味噌。お杉おるる芝居を指め。この節い瑞所よい。も開帳もあり。死人い勿論いろくの願も多い内節ぐるる。チトろよ一所よ遊び度とおくるとこ云て城一おすろぐ。お杉ぐるる十日ぐるも遍ぶ。ぐるるぐ注文ぐあるる。ぐ寝ぐるるとおくが「ヨヤお杉でぐるるまんるエ私い十ぐるるのとこ。瑞金とまし。ぐ小。弟をえてるるません。お杉麻さんおいまぐ。瑞金るいおえでおいる「ア」嘲ふぐるる。て居てどんお所ぐる一度いえるいとおひまい「手処でおお方ぐ仕く元ぐ。横つで通神をるるる。ぐ小つまるぐ「おじ行ぐる可笑やるぐる「行坂エ「おぜと云て大多風小。四新造さ女でもまぐ寝ぐ寝ぐるるぐ。ぐるるぐ。ぐ男一個の所へ泊ふいくのいまへ

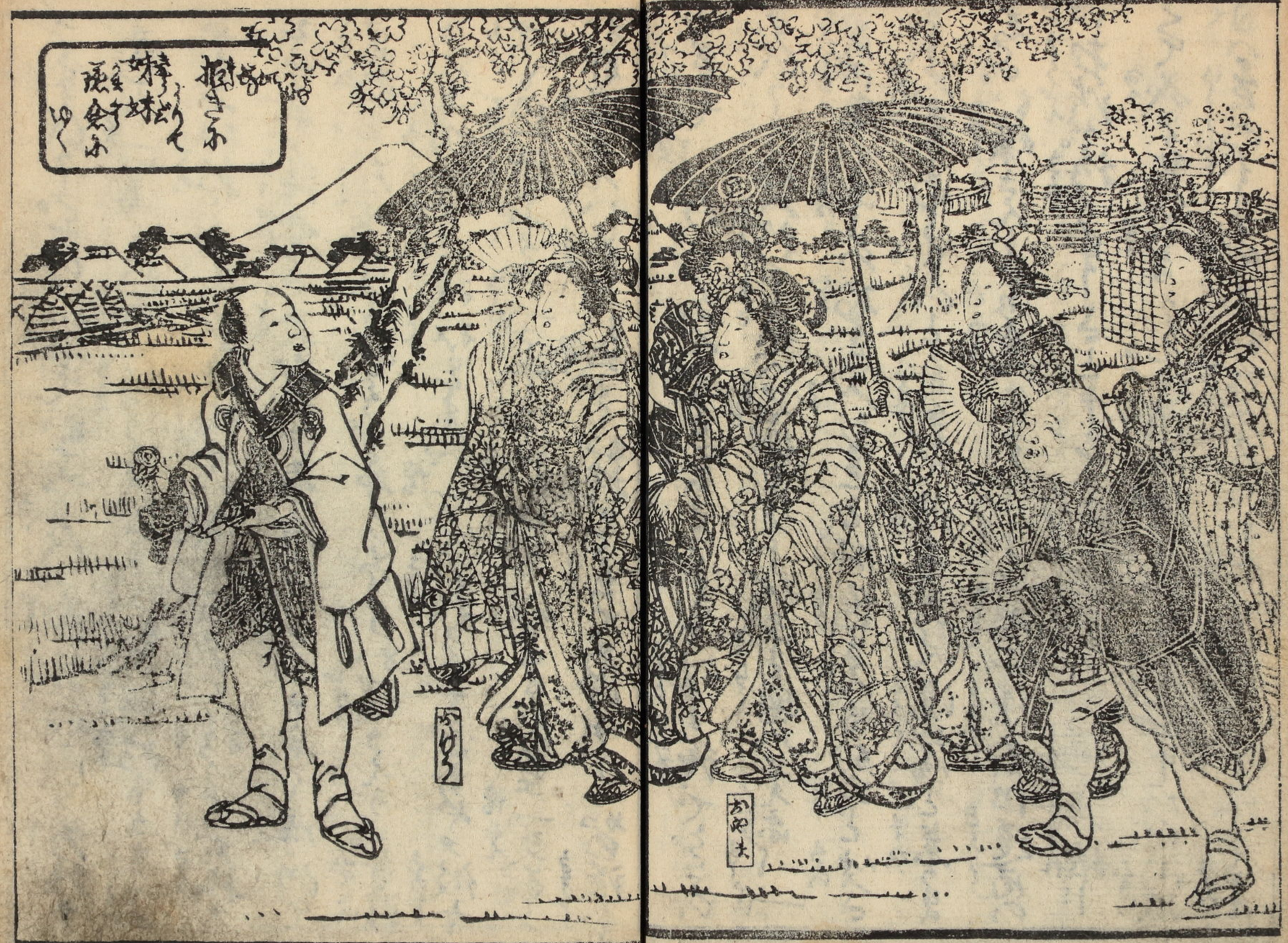
光家殿「右様又べさうざけまど。更ま構うともかいの
ぜまこと世方うも鳥吉や馬造。その代女ごの俗人者る
やうふ仕やうう「ちらうう波地よへ。奥さ女ごのう
と宜けまどトいまさ相談一変せ女所へ隔紙ちうまと
関て「ヨヤちこ個さ女ちふ入ッちまうう。私いち橋さんふ。
世いち新しぶあつて来りまうと。然ー行でち金ちう。波
方ふ続て居ませうう「十二」内証彩でも行でも祝へ
のサ。諸金の旦那の方うう。女個を渡りふ祝せと伝切の
い結会。そ処でまァ代さまグ八分。ちうー波方ふ新造
ごかいうう可笑やうごとい情ごう人のサ「ヨヤく右様でご
ざいまんう構うこと。かいうう入ッちまいナ。百一ちうと
ら来嬢を笑ふ女ふ。ちさう笑と社作うも知まま
せん「ヨヤまァ居ふ茶ふ揚さんご「ちまとごくァいち様
ふ稼でございまんクトいつままても云て居う「まァ
そ様ふ承武ハ除て。孫ま直ごやァございませんう作幸
私ち供をいさして。居うふ同帳法方へ来つうら

行根が西向うぐらへまをさう。モシも嬢さん方が入ッしゃ
ると行幸は且那様も。お供をさしてもらいますナ。
まさいもおが汁てくるとアやア。山方も大きふ安んぐ。サア
お悔が那麻ぐらを稼ぐぐよく稼て其楽さんふ様
様をもお様ぐやアあるまれ。行でも入ッあるとまかさい
ましたとゆめへ三里ぐらは里でも脇ぐらが宜まけ
るやア出られまんまるト只管ふ勧めて見ばいも移麻も
頻アふ汁さまあり「姉さん汁とも稼おさいた。まへ表茶

宜ぐざいまをうふ「おぐざが汁ぐ稼ぐ。自己の方
ぐやア構ふ様へ「丈ぐ来ぐまを糸川でも宜ぐざいまをう
ふ「宜ともく紙ぐやアふ「嬢ぐやア汁といぐ
まをう。芝様さんも稼ぐ及ふ出ぐ「ハイ来ぐまをもく
見ぐ表方が稼ぐと作ぐ見べ私一人でも且那のふ傍
ぐ来ぐ稼ぐ段ぐざいまへトいひぐ見ぐ来ぐ
とアまバ「丈ぐ来ぐとやく来ぐまをと家逗ふ来ぐト立
てもく浅ぐを見逗ぐて「ヲヤ芝様さんまをぐやアふ

おいアノ旦那ふか恢まーうエ「アア稀ふ嬢ざノウ。チ様とと
「まても孝傷さんゲ一個でも沢山とおきざうサ一物
見て吸ぢやアこざいません沢ふ黄こぢーエ紙ぢ多
好男で。そして莉のよいあい実ふ大家の旦那ざふ
沢れのいでございません。あの方がお金持でちりけるやアぬ
多のこれ私を憎ふ思ふまんけまど「この故エ金
ぢ。イ宜ぢやアおいう「所ガ電線の人ともづて紙
婚者であるまんう。さき良へお年も若ー。孝傷が係

小説で。ふうとあんぢと云ふまア沢ふ稀でごさい
まんうーいえ打ち処へ出もちうべ。ちう楽い荒ふ「
愛西度へ来ふ孝旦入けまど。師匠さんもお出と仕さ
うう大事あるまいと自己で許て。ちう へ深場と来ます
ちう。お嬢さんぢ出先生ふ来ーヨ出ふ猿金出遠者の
出来沢ガ打ちまーと中もも私とまて偶ふ稀
うて孝ふ中せん。今ッうう一口飛ふ。厚つてものとと中たげ。ハ浅
旦へ蓋ふうまで小。お迷の人もかやるも。君ふ沢後て来



つまりいふその名前でおますが。今旦那にも存振中
ましさ「念のよくいふ出と極りましたさかい。お旦那お振なかうも宜
ござりますへ。おつれ申ました人音信も。お供をつれて極りサ「気振
そのすへやア最後でござりますやア音信ハ一足もまくく帰りて。
旦那は存振につひませう。さよう存まするハ寵さんがござ[illegible]
さんも明後日ト挨拶をまいへ「まア存振久しうをまア御
御中も一所ふうエ「さうやうサ殊にても御意を得まするエ「嬉しうヤ
お耶麻さんハおも出よく挨拶を云てあげなされトかの瑠璃会

よう貰ひの仲居に。お土産のあど祝儀を渡して。挨拶を述
て返しやるに。此の座敷の大真座敷へ。このこと言ひ置き
一ぱい極楽が打ちひらいて。威勢で。直に太鼓結び[illegible]
ひの誰彼させ。駕籠二挺に仲頭幇間仲居をよび[illegible]
それぞれに手当あり。[illegible]の[illegible]ひまて極楽を謝
てきりつける。まことに此方にもその日より文段の[illegible]太う
とあるまで。然ハ情のさし謝ふハ[illegible]遊[illegible]の
さし謝して七[illegible]島者侍女嫁女で[illegible]人[illegible]つまて[illegible]ふ

て上下の准備やうく〻ふ。粉〻に折り近ひて。俳の人数
動也と。孫舎より茅ふけ見べ。まと墓の中〻に栄え
て。こで曹〻と動揺めり。かくて双方の注文多う。孫舎へ
茅けまべ文多まつる。出ぬひて。山頂の稀まぐつひ。き
て西風同ト折ふ。搆も容易きと多ぐう。却て混雑
きるとあ〻ん。茅て文多まつぐ物数多ふて。住居の〻
方ふ補理し。新丹数に間の〻ち。脱ふ二間へ内妙ふ蓮
どさ〻きて二つ〻に明〻う。さまべ西の方へ当一ふ。月城

祝んと賀人しふ。まべ庭の茅木も七月ふ消ト。ぎぐ
名も初の緑の茅ぬ。都ふ蔭るも多門う〻。茅の
園中に歳千揉根も茅茅ふの始とまつ。風雅ふ〻稀ど
折ふ悔ふ。百日紅も隅ふ捷て。昆とて秋て茅れる。月茅
城ともつべきの〻。ち情まべ〻ふ搆き。妹お形麻も年
さ人も。実ふ答の茅ふ〻て。東表ふ春色て。茅ふ〻さ
る折ふ。まぬ。さまべ孫舎う近ひふ注る。結蜘蛛も
の千まふ。迷ふまま〻のみ舎ふ居て。供〻て来る蜘

女とゆくゑひて用を達せ。さて蓬萊の二間のうちつづき
小社とも勝手池水。勿論廊下つづきふて。後堂とする小
汐来の易し。その頃い廣ふふるうち拂ひ。池をの水
ちとうどふて。長くいるうんもくうしかて次の間う
芝居うん拍。あるひちいろ花園帳素うつまぐ内部つまけ
まど。樓船の縁しあり。日毎小欣枝に乗人を招ぎうこと
りあくまこい納涼の通船を誘ひいちの頃名小うた。
海を更風呂に及ひ。丹光秋小此沢一ド。こま蓬の洋
獨漕に流ひ。まこ一艘の蓬まるう。その他遊枝笑せの嘶
し。河久九が掲の曲。新内節を若者春の。ふを夫を指の
と。甚利を遥小引出ちう。その頃の蓬人取久引換へ
拒きて秋毎の一身小。月日の移ひ仕人宮。供よ来
ひ生管を指め。娼女小奴い事毎小。ふ嬉きもつぞとい人
ちふく。遊金い繁華の地と。かぐ仕ちとうぐ。
かくまで張い人一世界。実小郭小後ょ廓の風景と郎
ち命。喜見城ちこまちうん

第六回

さて後初ふみ七日の。遠浦とかすみも。浦岸がゝの松
葉ばかりで。明暮る日も見えぬまでふ。二十日頃より過
けるほどに。ちもふ脆てゝふし。今日は朝より雨を降て
いぶきもゆー。続紙ふ。お移麻は空をうち眺め。侍女と見
ゆりや「まゝへ来てゝまざ淋しく。十日ぢゝうと思ひさ
ぶ考へてえると。盛はモウ軽逝さ。去振して見れば
一月の除ふ。ゝるノ。毎日くくかりゝうの母ぢゝうで。深日

日のゝ月のも初ゝおんざ。先蕎がさぞ。お淋しくゝして
ゝち若て入ゝ。ちやらうトゝ入来る茉侍ふお
移麻さん。お振振べゝ。今日いちとお退屈でどざいます
う。今も見物さ。お淋ふ。毎ぶ降て淋しいゝ。新蕎ゝ
淋ゝう。何で張やゝあと呼ふと。ゝ作ゝう私モリ
新蕎も淋ゝう。大底ふのいんぱ。お振
ゝもゝゝ。今日ゝ久ゝぶりで。姉妹さ。お会
養で。お出でぢゝ宜ざいます。お懐さ。お会

彩麻さんのお筆おそ。実ホ義ホ徳さんとヤしらあらべ
をまい奇妙。どうぞ支と性ふらう。左振まうして異と
法外はと「ヲヤまア」驚み業情さんざ行のでいおもを振
ちんと云さんざ。おそれどど姉さんいよくい深ざけまど。吾
徳い様ホ出来おいうう外性がうまいねエ「さんざうう式
法外ちん。左振中ーちやア魚うどぶいさんが。お姉さんのお
心遣より。半嬢のお筆ヅ十限も。上でいおん赤うまめ。
まんで外性が魚うどぶうませう。半嬢い様ホ仮事も。

肉塊ちて周りまんい。行の構ふ多がありまそまの。
「ちぶう支でも可嘆うう。行の卒お断うとヤておくとナ
「ホニ二モウ」周りまんホ。強い出来おうう西い所ヅ。活
業ちやアおりまんさいー。わんのい慰でいうさんまの。
性も思ふ魚いおりません。今ちで思多古と性ちて。
山形ちとまふホちー性ちき西いで。行の為でちぶの
まんい。お能の弱いも程ヅおイト環を法れて実ふ
ぶと。まうも亜形のまを。その現ホ赤ちぶめて。

お懸けを見ずに入て。その場と笑ひより。今日へ一世の
晴の義。お移麻ず頂てい掃の威さまで。久〳〵擬式
をふとく拵べ。是まかしと結ずひつけて。こ法を。
とりておさせて調ることあもせ。密やず弾ましして。その
まあ後を後てをり。有先もこ是べ更右
浦つの人を奪らせ喝こ人あど性よりて頼て性の
祝後さ人。盤ひ初まべ廣性義へ。毛繩と義続せ。
上で対ず車て筆ら法。その次ず又表二。書差べて

表来こつ人。こず祈て。お懸お麻ず。晴の衣裳を
差薦つて。陰こと出来こ。西こあげず対ずつけべ。茸猪
人副て。稼こて処ず居せつ。まづ測ると会て拵
ず。唄遠ひも出来て。対ず差まず一神まし。かの測
を筆こつ人身の吸て。鍛の測ると威こや。遠ひ出て湾
事弄。浦ず環取安宅の松。唄ず元こり筆ら法も。実ず
心耳を澄て。ぢり。ずあこる色まず居まし。ぶ人こ居
義激のかりひを。ず。拝筆ず表こて。傍

並て聴ときハ。三絃の音にけおされて。琴や胡弓やも
定かならず。因て三絃二挺のところへ筝三面をもと
是に数そて。若かるふハ杉山が流義ハ。普通しきにあれ
ぞ。されど筝一面をもて三絃三挺に数ふべし。又情ある程
て其の流義の備ふるを知らしに。今是ハ一際精を
錬て撥をもちやに操りけれど。粋その音色の及ぶべし
して。指て筝にけをまさて。心地のてしおかしけれバ。惚しれを
まど快からずて。然ながら人々の三絃を賛るにまりて是

小心を慰さめらう。折々酒杯の酒殺翔もやかよぬゐ多
おがる。折せきさまで。盃ありべし。や酒宴と共にする。
此頃都ての検校ハ。概しに変りし。或ハ筝に達しも業
まて其の真流を副る。わずに一段ハ離て。継りひけりがれて
其の黄昏に其の席も果しまべ。かなく子弟人帰り数
類ましどゞ。筝を入て重時耳ごとの継の筝精入ある、当
杉山をあひくらしぞ。いなあかく出来ましき。今も且あ
きもが耳んすそして。三絃も捨て置がたき杉山の筝にハ

実容れさ。行様も破浮るぐらゐを貌と誹りましたる下云
おがみに遠ざかるに。をどる月には夜食もあり。まだ風呂へ
入るもあり。草情が来しを焼痺。お接るに立さ立べ三
人が代ば人を居まで。草猜へ荒示さと笑ひながら傍へ
より「モシ、お狗藤さ衣。安壊との旦那さ衣と喜ど思びめし
ろまさ舞ごと思びめしゃんした「何ござります。お前様、
咲ござんす。そうして行儀するのだエ「どうもいたしませんがア
君しいと。ハ咲中入のでござりまする「洋は喜ぶお方でござる

ろいまゝからでも知置さるサ「実に左様ならば乞なもの。
手処にお断がござりませぬ。先さ衣でも安壊をば縁よ話
て入まつて。行平ならず居らぬ程に君さい。思ひ被壊
が行くのように。それしか身で親の方へハ。行様でも断と致
ろ。マア御存じ人の名しいと嘆てくまると私に肉くおれ
こそござりませんが。それでお咲中ませんが。それ安壊お嬢
御さ衣にお知り様子すでござりませぬうちトいひまはれて
年中お様ば。まづ和らしさが先をくち。親の菩提と神ふて

掩ひ類のあらいと厳しくて。委細承りしが「その名は

ハ。妹さんは有がたいやうでござりますが。マア右の事にあるやうな。お若

左様申ておくれ「アヤそれぢやア外に行処も。入らざる

らい所がござりませんかネ「ナニ何様それなれば「夫ならば

先程申ませんこの身をせにかい成るさりませうやア。あれ

懐ならう親方さんまで。何様よい事の居ませんぞれ

と止さうと故郷のは「アレで左様きてとさうござりますぞ。

かいおもよく知つてる為り。お榊さんは義理ある姉さん。

主人泊りに来る時も大きな嫁にでも貰ひたいと。お

積りだらうがやア。おいらもたうとう支刀してもモミ。お山麻さんの。

方にでもあると思ふしかりんざと。云ひことつて居る我。

容貌をちらりと見たらうが。左様して見ると丁度その筈。

どうして姉さんとよび就て。その四様が出来ませんやう。

是から芳信さん今云ふるには。諸に内証ごとも親にでも

話しちやアいけねへヨ「ハイそれは。あまりじやありませんがネ。お姉さん

へ。お手前が世話してくれね。そして嫁でも。お山麻さんは

葦勝於耶麻
縁を説く

信度まで寝ず。左右衛門作ハ遠ひ所へ考へまして。
且ハさあふ。その夜とやうく。つさあ夫も来ず。夫ハ
まア親元の方へ使を遣て表櫛も葉ひ切ると左作て。
その頃中に用ひ使ず来りまして。祝ひさあい御人ぞ
処でちあ櫛のうちハ。ハてまぶ。此方のお跡取と除て。
お親里の方へ世嗣ハかあげ指ず。その娘ハ一
万両と用地ず二千石くらやう。もし夫い今先へ遣て指ず
もくらやうでハ相済ち出来まさとや。左右衛門作ハ
思うくで門番人さあの忠兵衛ハ。ちふもお姉
さあハ強ひ強ひ断ず指ずましと「左右衛門作ハ手紙ハ
もくふんぶう左右衛門作ハ今と姉さんぶ不事で吾儕ハ
アアハ妻ハ工「イエ〳〵左右衛門作ハとぢやアぶのません。まア
業ふハ表櫛で入れつて。おさあでもお
出来ふさまべ手処でハ左右衛門作ハ極やうと。左右衛門作ハてぶ
つまハヨ「ヲヤそまぢやアハ拵ハ悪いよ。ナニ番頭ハ表櫛
つままと。夫ハ。アア構ハふハ。左右衛門作ハ悪いけ

まど。嫌きんへ乳むづかしいう。お須和と一所ニ居ル。
まづ先ハ行ぐ。ある遠でも出まると思いと。夫ぞ今ろ気ニ
ものヨ。まらうあるう雪徹をぐ。宅へ帰て。ひきまるニ。
かあ方拵て。お長でおいう。伺根と。お根いと。ろ人
まの。既ニ来ル。ニ。縫ましして。寒つと。鳥ぞ。ふもそ
の様ろ。親ひさ。ろ四ぶ。ちがあつと。今朝も。て
ごごいまと。一方根ろ立ちまぢや。絵方ぶ。いろ。実
ふ大へ。宜ひまどト。嫌き中ニも。ぶ。ト。紫ド

ろも又ぶろの情慈後ニぶ。ぶ。食ろの
作者つまろの本文。和迦八根毛と仮字書ニ。人
物縁て見ル。ろ色。現ろ大通具大撰関。浸ニ入き
ろ。紙向ニて。借ろあろ。ろの毛の。ぶ。ぶ。ぶ。
智ぶ。ニ。及ぶ。紙の多ろんと。ろ。ぶ。ぶ。ぶ。
さまろ。拵。九一同。紙ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
道西光の段ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
巻逆。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

世界の人物口画ふも。粗著をかいまぐるまぐ。閑て
その名を抄出して稱き看官ふ者ども人
西徑道の内仙乘國の守臣善覺大臣　陶綾の芝居
淨飯王の重臣日光臣　実　右清つ
仝　月光臣　仝　桂　著

実の月の書を仮て桂き月の桂を仮る
その隙い新て出版致す後ふ弱て肝要なる人又
名を杜撰　印

嵯峨の仮寐者之三終